

## オマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、とオマーン

(P.165)ムスリム達の国家の最初のイマームであり、最大の正しき言動者のアブー・バクル、神が彼に慈悲を垂れ、そして彼を嘉し給わんことを、彼と彼のオマーンにおける業績については先に述べた。彼はジャイファルとアブドをオマーンの国王として認め、そして彼等に対してオマーンの人々から喜捨を徴収し、そしてそれを彼の元に運ばせるものとした。そして「アルカーミル」の著者であるイブン・アルアシールの「森の獅子」と言う書籍には、アブー・バクルはコライシュ族のアクラマ・ブン・アビー・ジャハルと言う人物をオマーンの総督に任じた、と記載されている。それから彼を罷免して、イエメンに赴かせた。そしてオマーンの総督にフザイファ・アルカアルアーニーを任じた。

そしてオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼がカリフの座に就いた時に、彼（フザイファ）をオマーン（の総督の座から）罷免した。そして彼をアルヤマーマ地方の総督に任じた。そしてヘジラ暦 15 年にオマーンとバハレーンの総督にオスマーン・ブン・アビー・アルアース・アッサカフィーを任じ、（これは）彼（オマル）からの命令が来るまで続いた。

そして「系譜」と言う書籍で、アルオタビーは前述のアッサカフィーと彼の兄弟のバハレーンの統治に関する任用について語っている。それからオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼が彼（アッサカフィーの兄もしくは弟）に対して、ペルシャ王の息子の元に海を渡って行くように命じた。即ちこの人物はペルシャの地において彼の父を殺害した者であった。

そして前述のオスマーンは、オマーンの人々の中の英雄達と共に出陣した。彼等は 3000 人の騎馬隊であった。そしてアズド族、ラーシブ族、アブドルカイス族、ナージヤ族出自の 2600 名であったと言われている。オマーンの侵略軍のリーダー達は、シャヌーア系のアズド族におけるサブラ・ブン・スライマーン・アルハッダーニーそしてマーリク・ブン・ファハム家の当主であるヤジード・ブン・ジャアファル・アルジャフダミーであった。サブラの父親は、アミール（オマル・ブン・アルハッターブ）が彼との相談を望んでいなかった者であった。

即ち、（ペルシャとの）ジャルワラーの戦い（637 年）の後、彼の元にオマル・ブン・アルハッターブの命令が来た時、イムラーン・ブン・アマル・ブン・アーミル族を率いていた。彼等には或る一団が随行していた。つまり彼等は侵略者としてペルシャに向かって出陣し、ペルシャの様々な地域に彼等は進軍し、浸透して行きその果てまで至った。そしてとうとうイラクの北のトージュの地にまで到達した。そして彼等は激しい戦闘に突入した。そして巨大な（軍勢の）波と戦った。

そしてこれによりアラブの地平線（アラブ側）においては湧き上がる様な声が彼等の為に響き、ついには（人々の目が）彼等に引き付けられるまでになった。そしてオマーンの人々を素晴らしい諺で表したのであった。何故なら、昨日つまりアブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼の時代に、彼等は大シリア地方にいたジャフナ家と戦う為に出陣し、(P.166)そして今日ペル

シヤの諸地域に侵入し、また解放（征服）して行った。

そしてこのことにより衆目が彼等を偉大なものとして注視し、そして尊厳を伴って彼等に注目した。そしてバスラの人々は彼等を偉大な者とした。即ち彼等はそこ（バスラ）を、王冠を被せる者達で溢れさせた。アルオタビーは（彼の著書）「系譜」の中でこの問題について既に言及していた。そしてイマームであるアッサーリミー、彼に崇高なる神が慈悲を垂れ給わんことを、彼が（彼の著書の）「宝物」中でも指摘していた。

そして我々もこの表題においてそれに言及した。同様にこれらの出来事の指摘と詳細は広範囲なスペースを要求する。特にオマーンの歴史はあらゆる物よりも不明確で奥がより深い。何故ならば、我々がこの巻の序章において貴方に語った様に、世界的な出典を持っていなかったからである。

イマームであるオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼のオマーンに関する業績の中には、知識人達が語っている様に、ダバーの民を離反行為であると、彼等に対し自己解釈して捕えた（徴税人達の）長への反論が挙げられる。そしてこの事がたとえアブー・バクル、崇高なる神が彼を嘉し給わんことを、彼がカリフ職に居た時代にあったことであっても、オマル・ブン・アルハッターブは、既に徴税人達の長に対して類例を見ない様な激怒をしたのであった。

即ち彼は彼に言った。「神に掛けて、私が知らぬ間に宗教の（名の元に）汝が彼等を捕虜にし、彼等に対して（裁定を）断言したと知れば、即ち汝が彼等に下した裁定のことであり、それは彼等の連行と彼等の財産の戦利品化であるが、私は汝をバラバラに切り刻んで、それから汝のバラバラになったものを各都市に送るであろう」

そしてその中には脅迫の誇張がある。即ち個人的解釈を啓示の元に置こうとしているからである。そしてこの事が言わんとしている事は、懲罰を公表することである。それは人々が、真実は総督達よりも偉大であると言うことを知るためである。そして彼がそれ（上述の言葉）を諸都市に送った事の中には、断固としたその行為の無効の表明があった。そして地上の全ての地域にいるイスラーム教徒達の間でその事を公表すると言うことがあった。そしてオマーンの民が背教したと言う者への返事があった。

しかしイマーム（オマル・ブン・アルハッターブ）神が彼に慈悲を与え給わんことを、彼はこの彼の（徴税）長の懲罰に対して、目を瞑っていたわけではなかった。何故なら彼はその状況が諸事をもたらしている事を考慮した。つまり彼の脅迫は、真相究明の前に彼等（オマーンの人々）に対して為された彼（徴税人の長）の暴挙に対する対応として充分であった。そして（徴税）長にとっても彼の行為を正当化する論拠は存在しなかった。それどころか彼は実際に彼が思っていたのと近似した事に依拠していたのである。つまり彼は行動において誤りを犯したのであった。

そして宗教は可能性を固定化していない。そしてイスラーム教徒の或る集団が行っている様に、宗教的に思い込みを採用する者は誰であろうが、禁止されていることを犯しているのであり、迷いの道を上っているのである。（P.167）そしてこれはその様な事を為した者に対する、教友達、神が彼等を嘉し給わんことを、彼等の諸行為である。そして彼等は正しい手本であり。重きを置

かれる論拠であった。そしてイマーム（オマル・ブン・アルハッターブ）神が彼に慈悲を与え給わんことを、彼の言葉がその核心において指摘していることなのである。

彼等を連行した者は、ダバーの日に自己解釈を為した。

アルファールーク（オマル・ブン・アルハッターブ）はその解釈を否認した。

即ち彼等（オマーンの人々）がジャーヒリーヤ（イスラーム以前の時代）の呼び掛けで互いを呼応した時に、彼等が離反したと彼（徴税長）が自己解釈した事は、彼（オマル・ブン・アルハッターブ）に否認されたのであった。つまりそれだけで彼等に対して離反の裁定を下すには十分ではないのである。つまり彼等は、離反の意味の観点を断ち切って、以前から彼等が相互に情報を共有することを行った可能性があるのである。

そして如何様にしてオマーンの人々が離反しようか。即ち彼等は既に自発的に改宗し、そして神の使徒は、彼の記述されたハディースの中で知られている様に、彼等に対する彼の称賛はあっても、彼等の事を、軍靴や蹄鉄で蹂躪した事も無かったのである。

ハルフ・ブン・ジヤード・アルバハラニー翁、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼は古きイスラーム教徒の学者の一人であるが、次の様に言っている。「それからオマルはダバーへの民の命令を取り消した、即ち（徴税人の）長が彼等に対して裁定した判定を失効させたのであった。

（その事は）彼が大いなる脅迫で彼を威嚇した後のことであつた。そして彼は、人々即ち、ダバーの民の中で連行された者達を彼等の家に送り返した。即ちオマーンへと、である。そして彼等に徴税人が戦利品であると思つた彼等の財産を返却した。何故ならば、彼等からの離反を証明できなかったからである」。

彼（ハルフ・ブン・ジヤード・アルバハラニー翁）言つた。「そして彼（オマル）はイスラーム教徒達に対して、彼等が蒙つた物を報いた。即ち彼等が失つた物を 300 人に対して（貨幣）300 で弁済したのであつた。即ち彼等の内一人一人に対してである。そしてそれら（の金額）をイスラーム教徒達の金庫から取り出したのであつた。

私は言つた「この事は任命された者の過ちは金庫から、と言う例証である。何故なら彼（徴税人は）イマームや裁判官等の様な者達で、イスラーム教徒達の中の任命された者であつたからである。即ち金庫はイスラーム教徒達を健全な状態にするべく設置された物である。そしてこの事は彼等の健全さから生じているのである。つまり彼（オマル）は自己解釈による誤りを、金庫における（代償）と見做したかのようであつた。そして金庫とは何であるのか？それは喜捨と戦利品以外の何ものでもない。

そして既に神はその 2 つに対して適正で正しい裁定を下していた。(P.168)そして既に学者達は、その事から、イスラーム教徒達が彼等の金庫から支出が許される適正な事を得たのである。つまりスナ（奨励行為）はクルアーンを解釈し、そして預言者の諸行為は明確で適正であると言う事である。そして彼（預言者）の諸裁定から枝分かれしている彼（預言者）の教友達の裁定も同様である。

そしてイマームもイスラーム教徒達の諸利益に関しての見解を有している。それが故に彼を彼

等のイマームと成したのである。即ちクルアーンの諸例証を持って彼等の諸利益を考察するためであった。

つまりイマームである（オマル）ブン・アルハッターブ、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼の見解は真理の目であり、そして真実の舌であった。何故、否と言えるのであろうか？彼は利発で洞察力を持った人物であった。神が彼を嘉し給わんことを。

オマルがオマーンの人々の誠実さを知り、そして彼の元で、アブー・バクルの日々における彼等の（イスラームへの心の）確信が定まり、そして彼の時代において彼等の情勢を考慮し、彼等が自発的に彼等の手を引いたりせず、イスラーム教徒達を集団として騙していないことが分かった時に、オマーンにおいて、彼（オマル）は何も事態を変えず、静寂を揺り動かすこともなかった。何故なら預言者の言葉で、彼は落ち着いていたからであった。

即ち彼は自分の耳でそれ（預言者の言葉）を聞いていたからであった。つまり彼はその正しさを知って安心していたのである。そして彼にとって、オマーンにおいては、我々が言及したこの事以上の活動はなかったのである。

オマーンは彼の時代には、他の残りのイスラーム諸王国と同じ様に静かで安寧であった。そしてオマーンの人々は、彼等の（生活）圏が遠かったにもかかわらず、諸共同体の中で一番真理を導き、彼等の中で（それを）一番追求し、それを一番知っている者達の中の一つであった。次の様に言われている。

（オマーンは）豊かな道標を私に見せてくれた。

（メッカやメディーナ）についての知識が乏しいにもかかわらず。

オマルはオマーンへの道を知らなかった。

知識は大海原のようであるにもかかわらず。

この事に則って、オマル・ブン・アルハッターブ、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼の時代をオマーンは生きてきた。（それは）ヘジラ暦 23 年ズル・ヘッジャ月の第 14 夜が過ぎた時に、（オマル）神が彼を嘉し給わんことを、彼の殺害による死去までの事であった。アブー・ルウルワと言う男が彼を刺したのだが、彼はキリスト教徒であるともゾロアスター教徒であるとも言われている。そして彼は彼の 2 人の友人である、預言者と彼の嘉する大臣アブー・バクル、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、と共に埋葬された。これが嘉し、嘉される 2 人カリフ、アブー・バクルとオマル・ブン・アルハッターブの時代のオマーンである。

そして歴史とは最大の証人であり、最も論拠が正統なものである。即ち様々な出来事について表現し、そして個々の出来事をその話し手から受け継いで保持しながら、記載されているのである。そしてそれらは望まれるそれ（歴史）の益の 1 つなのである。

## オスマーン・ブン・アッファーンと彼の時代のオマーン

(P.169) オマル・ブン・アルハッターブ、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼が亡くなった時に、(既に) 彼はカリフ職をイスラーム教徒達の間諮問会議に設定していた。と言うのは、彼はそれ(カリフ職)に関して様々見解が競合するのを見ていたからであり、個々の人物が首長職にある種の見解を持って、それ(カリフ職)に関心を抱いていたからであった。

そしてそれ(カリフ職)に苦悩している者を除いて、それ(カリフ職)から距離を置かねばならない状態であった。つまり理性有る者、彼がどのような人物であれ、カリフ職に関心を抱いていない者のことであるが、自らの苦しみと、力強く威厳の有る神と共にある彼の報酬を考慮するのである。

つまり首長職に憧れる事は、隠された食欲の事であり、我々は神にそれからの救いを求めるのである。

尊大さが勿論それ(カリフ職)から離れはしないことは、疑いもないことである。既に神の使徒は言われた。「彼の心に尊大の辛子の粒程の些細な物がある者は天国に入れない」。そして神の尊大さは、それに関して彼(神)と競合する者がおらず、地獄の業火において、彼(神)の眼前で平伏する者(いない)と言う事は疑いもないことである。

ユースフ・アッディークのイマーム職に就いての質問は、彼がそれ(イマーム職)に対しての改善策を自らが知っていたから以外の何ものでもなかった。そしてこの事は真理におけるイジュティハード(法源の独立した解釈をすることによる合法的な決定)から生じている。同様に栄光あるモロッコの女性達の1人がその事を指摘した。

偉大なる碩学フード・ブン・マハクーム・アルハワーラー翁が彼女の処に来た時のことであったが、彼女に司法判断を求めた時に相談した。つまり彼女は彼にこう言った。「もし貴方が、人々の中にこの件に関して貴方よりも相応しい人が居る事を知っていて、受け入れるのならば、貴方は地獄の業火に(くべる)材木になるのです。即ち、もし貴方が、彼の方がより正しいと言う事を知りながら受け入れるのであれば、貴方はイマーム職に対して食欲にそして(それに対する)恋慕を受け入れると言う事です。そしてそこには破滅があります。我々はそれに対して神に救いを求めましょう。

彼女は言った。「もし貴方が、この件に関して、貴方より優れた人物が、集団の中に居ないことを知っていて、拒めば、貴方は地獄の業火に(くべる)材木になるのです。即ちこの件が貴方にとって義務となっていて、貴方がそれに任じられ応答する者になっているからです。そしてもし貴方が貴方に課された義務を果たすことを拒めば、貴方は神からの懲罰に相応しくなるのです」。

オマル・ブン・ハッターブがカリフ職の事で悩み、人々の状況を熟知した時、アブー・バクル、彼を神が嘉し給わんことを、彼の行為に従うことにより、イスラーム教徒達の杖を割らない為に、それ(カリフ職)に一番相応しいと彼が見做した者についての助言が語られた。

(P.170)オマルは、諸状況を見渡した時に、イスラーム教徒の誰一人に対してもイマーム職に

関して薦めることに合意しなかった。つまり彼はそれ（イマーム職）をイスラーム教徒達の中のものに選ばれた者達6名の間の評議会にしたのであった。（それは）最も正しい行いを考慮するためであり、そして分裂を断ち切る根拠に彼等がなり、離別を押しやるためであった。

そしてこれ等の者達は、アリー・ブン・アビー・ターリブ、オスマーン・ブン・アッファーン、タルハ・イブン・オバイドラー、アズバイル・ブン・アルアウワーム、サアド・ブン・アビー・ワッカーズそしてアブドルラマハーン・ブン・アウフであった。そしてタルハは不在であった。

つまり彼（オマル）は次の様に言ったのであった。「嗚呼、最初のムハージル（メッカからメディーナに逃れて来た者）達よ。私は人々の諸事を見ている。そして私は彼等の中に分裂も偽善も見ることがない。そしてもし私の後で、分裂や偽善が生じたら、それは貴方達の中での事である。3日間相談し給え、もしタルハがその期間中に貴方達の処にやって来ても、そうでなくても、貴方達が貴方達の中の1人をカリフとして選出するために、3日目以降に貴方達がばらばらにならないように、私は神に誓って、貴方達に決断を下すであろう。

そしてもし貴方達がこの件でタルハを指名したならば、彼はそれに関して資格を有するのである。貴方達が相談を行うこの3日間、スハイブに貴方達と連絡をとらせることにする。つまり彼は解放奴隷の1人であり、貴方達の件で貴方達と争うこともない。

そして貴方達は、アンサール（メディーナでメッカの移住者達を支援した者達）の中で有力者を連れて来なさい。彼等は貴方達の件に何も（利害関係が）無い者達である。それからアルハサン・ブン・アリーとアブドラー・ブン・アッバースを連れて来なさい。つまり彼等は親族であるからである。そして私は貴方達に彼等2人がやってくることに對して、祝福をしてくれる事を望んでいる。彼等は貴方達の件に何も（利害関係が）無い者達である。そして私の息子のアブドラーも相談役としてやって来るであろう。彼は貴方達の件に何も（利害関係が）無い者である。

彼等は言った。「嗚呼、信者達の長（オマル）よ。彼（オマルの息子のアブドラー）の中には、カリフ職にとつての地位があります。彼を後継者にして。下さい。つまり我々は彼で満足しています」。すると彼（オマル）は言った。「アルハッターブの一族（オマル家）に関しては、彼等の中で、貴方達の件に何も（利害関係が）無い男は自重するのである」。それから言った「嗚呼、アブドラーよ、やっちはならぬ、やっちはならぬ、巻き込まれてはならぬ」。

それから（オマルは）言った。「貴方達の中の5人の事柄が正しく、一人が違っていたならば、貴方達はその者の首を刎ねよ。そして貴方達の中の4人の事柄が正しく、2人が違っていたならば、貴方達はその2者の首を刎ねよ。貴方達の中の3人の事柄が正しく、3人が違っていたならば、貴方達は私の息子のアブドラーに裁定を委ねよ。つまりどちらの3名かが裁定を下されるのだ。つまりカリフは貴方達から（選ばれて）貴方達の中にいるのである。つまりもし他の3名がそれを拒否したら、彼等の首を刎ねよ」。

すると彼等は言った。「嗚呼、信徒達の長よ、我々について言って貰いたい」。即ち諸状況の中で我々が貴方の意見を道標とし、そしてそれを模倣する見解を（貴方が）どう見ているかを（言ったださい）。（P.171）そして彼（オマル）は言った。「神に誓って、嗚呼サアドよ、貴方は戦い

の男であるが、貴方の苛烈さと荒々しさを除いて、私が貴方を後継者として指名することを妨げるものはない。

嗚呼アブドルラハマーンよ、貴方はこの共同体のファラオ（王）であることを除いて、私が貴方を（後継者として指名することを）妨げるものはない。

嗚呼ズベイルよ、貴方が満足の信奉者であり、怒りを信じない者であることを除いて、私を貴方から妨げるものはない。

彼（タルハ）の高慢さや尊大さを除いて、私をタルハから妨げるものはない。そしてもし彼がそれ（カリフ職）に就いたら、彼の指輪を彼の女の指にはめるであろう。

嗚呼オスマーンよ、貴方の部族意識そして貴方の民や一族を愛する（強さ）を除いて、私を貴方から妨げるものはない。

嗚呼アリーよ、貴方のそれ（カリフ職）への執着を除いて、私を貴方から妨げるものはない。そして貴方は、人々の中で最も相応しい者であろう。もしそれ（カリフ職）に就いたら、明らかな真理と正しい道に従事するであろう。（2015/10/12,P.170 上から1段落目8行目まで）